

青年期の自己中心性  
- AES 尺度日本語版と TST を用いて -  
山本真由美<sup>1)</sup> 堀尾真奈美<sup>2)</sup>

**Egocentrism in adolescent**  
**- using the Japanese version of the Adolescent**  
**Egocentrism-Sociocentrism (AES) scale and**  
**Twenty Statements Test (TST) -**  
Mayumi YAMAMOTO<sup>1)</sup> Manami HORIO<sup>2)</sup>

Abstract

Previous studies have examined the relation egocentrism-abuse and egocentrism-sexual behavior. But there are many scales of egocentrism and its contents are varied. The purpose of this study is to examine the contents of egocentrism. The method is to assess the Japanese version of the Adolescent Egocentrism-Sociocentrism scale and Twenty Statements Test for students in adolescent. As for the result, significant differences appeared between the Japanese version of the Adolescent Egocentrism-Sociocentrism scale and Twenty Statements Test. The study revealed some different contents of egocentrism at these scales.

Keywords : egocentrism, the Adolescent Egocentrism-Sociocentrism scale, Twenty Statements Test, adolescent

---

1) 徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アント<sup>ラ</sup>・サイエンス研究部 *Institute of Scio-Arts and Sciences, The University of Tokushima*

2) 独立行政法人 労働者健康福祉機構 山陰労災病院 *Japan Labour Health and Welfare Organization Sanin Rosai Hospital*

はじめに

「自己中心(自己中)」と聞く  
と一般的に自分を物事を中心と  
考え他人のことを考慮せず行動  
すること,あるいはそのような  
人物をイメージするかもしれな  
い。自己中心性は人間の様々な  
行動に影響を与える。Holmbeck  
ら(1994)は, 青年の避妊行動と  
自己中心性の関係を研究し, 避  
妊行動を取らない青年は避妊行  
動を取る青年よりも自己中心性  
が高いことを報告している。ま  
た, 虐待を受けた子どもと青年  
はそうでない子どもや青年に比  
べて, 自己中心性が高いことを  
報告している(Burack, et al., 2006)。

発達心理学で, Piaget が提唱  
している「自己中心性」がある。  
これは, 幼児が自分自身を他者  
の立場においたり, 他者の視点  
に立ったりすることができない  
という認知上の限界性を示すも  
ので, 幼児の認知的な特徴のこ  
とを指している。このような幼  
児期から児童期にかけての自己  
中心性は, 形式的操作に基づく  
思考を獲得する青年期には解決  
されていく。青年期になると幼  
児期から児童期にかけて有して

いた自己中心性から解き放たれ  
るが, 同時に新たな自己中心性  
に囚われると Elkind(1967)は論じ  
ている。つまり, 形式的推論の  
達成によって自分自身の思考に  
ついてだけでなく他者の思いや  
考えをも考慮することができる  
ようになる。しかし, 他者が考  
えていることと自分自身の関心  
とを区別することは難しいた  
め, 青年は自分がある考えや問  
題に取りつかれると, 他者もそ  
のことに関心を持っているに違  
いないと考えてしまうのであ  
る。青年期の自己中心性の特徴  
として Elkind(1967)は「想像上の  
観客」, 「個人的寓話」, 「自身焦  
点」という 3つの側面を挙げて  
いる。「想像上の観客」とは, 他  
者も自分のことを自分自身と同  
じくらい批判や称賛を持って見  
ているという前提に立って反応  
を常に予期し, それに向けて反  
応しているというものである。  
「個人的寓話」とは, 青年は自分  
が多くの人にとって非常に重要  
な存在だと信じているため, 自  
分の関心や感情は非常に特殊で  
独自のものだと思い込むよう  
になるというものである。そして,

3つ目の「自身焦点」とは、他者の考えや思いよりもむしろ自分自身の内面の考え、思いの方に注目するというものである。

このように青年期の自己中心性は他者(社会)との関わりの中で形成され、社会的認知が関わっていると考えられる。社会的認知とは、子どもや青年が他者を理解するために概念化し、学んでいく過程のことである。青年期の自己中心性は、幼児期のような認知的能力よりもむしろ社会的・感情的発達に関わっていると考えられる。

自己中心性の研究について、Enrightら(1980)は青年期までの自己中心性を測定する質問紙(Adolescent Egocentrism- Sociocentrism Scale, 以下 AES 尺度)を作成した。AES 尺度は、自己中心性(想像上の観客,個人的寓話,自身焦点),社会中心性,非社会性の下位尺度から構成されている。しかし、AES 尺度日本語版(yamamoto et al., 2008)では、個人的寓話因子は見出されず、自己中心性(想像上の観客,自身焦点),社会中心性,非社会性の下位尺度となった。その理由として ya-

mamotoら(2008)は、「他者と違うことを良しとしない日本社会の傾向が反映されているのかもしれない」と述べている。

また、Enrightら(1980)は青年期の自己中心性は青年期の前期から後期へと移るにつれて減少すると報告している。しかしながら、近年の研究はこの結果に対して批判的になってきており、自己中心性の特定の側面は全青年期を通じて一定して存在し、成人期に至っても存在し続けるという報告もある(Coleman and Hendry, 1999/2003)。また、根本的な問題として自己中心性の研究はこれまで質問紙によって行われてきており、青年が社会生活において実際に直面する状況の文脈を考慮に入れて来なかったという批判もある。そのため、改めて青年期における自己中心性とはどのようなものであるのかが議論される状況にあり、青年期における自己中心性に関する研究は未だ発達段階にあるといえよう。

自己中心性の程度を調べる別の検査として、Twenty Statements Test:20 答法(以下 TST とする)が

ある。TSTは、星野(1986)によれば、Kuhnが創案した検査で、「私は、・・・」に続く文章を20通り書かせることによって自分自身についての意識、態度および評価などを知ることができる。その回答内容は、社会的・客観的事実を述べた合意反応、主観的な判断を述べた非合意反応、氏名やニックネームなどの特異反応の3つに分類される。そして、合意反応から非合意反応に代わる境目にある回答番号をローカス・スコアと呼ぶ。合意反応と非合意反応が繰り返される場合は、20個以内の文章のうち、最後に現れた合意反応の番号がローカス・スコアとなる。このローカス・スコアはその回答者の社会的繫留度を示している。この数値が大きいほど自分を客観的・社会的枠組で判断しており、逆に小さければ主観的で自己中心的なものの考え方や評価をしていると解釈される。また、このテストは小学校の中学年から高齢者まで誰でも簡単に出来るという利点があり、質問紙検査とは違い、自身について自由に記述させるテ

ストなので従来の質問紙検査では見られなかった自己中心性がみられるのではないかと考えている。

そこで、本研究では今まさに青年期である大学生を対象に、今までと同様の質問紙検査(AES尺度日本語版)と自分自身について自由に回答させるTST検査を用いて、自己中心性を測定し、両尺度に違いがあるのかどうか、そして、違いが出るとしたらどのような違いなのか、また、青年期特有の自己中心性について男女別に特徴を検討することも目的とした。

## 方 法

1. 協力者：徳島県内の国立大学法人大学大学生 179名(男性 64名, 女性 115名)のうち回答に不備があったものを除いた 161名(男性 56名, 女性 105名; 平均年齢 18.90(± 0.99)に調査協力を依頼した。
2. 実施日：2009年 10月 23日の授業時間中に調査用紙を配布し、その場で回答を求め、回答後に回収した。

### 3. 調査用紙内容

3-1. フェイスシート：学部, 学年, 年齢, 性別の記入を求めた。

3-2. TST：「『私は, …』に続く文章を自由に思いつくままに記入してください(頭に浮かんだことをそのまま簡単な文章で記入してください)」と書かれた提示文の後, 1～20までの「私は, …」と書かれた用紙にその後続く20通りの答えを自由に書かせるものである。

3-3. AES尺度日本語版：自己中心性項目(10項目), 社会中心性項目(15項目), 非社会性項目(8項目)の合計33項目に「全く重要ではない」, 「あまり重要ではない」, 「普通」, 「まあ重要」, 「非常に重要」の5件法で回答する。但し, 本研究では自己中心性を比較するため自己中心性項目のみを使用した。

### 4. 得られたデータの処理

AES尺度日本語版の自己中心性項目を「全く重要ではない」の1点から「非常に重要」を5点とし, 10項目50点満点で算出した。TSTの反応およ

びローカス・スコアの決定は, 星野(1986)の分類を参考に心理学を専攻している学生6名で行った。

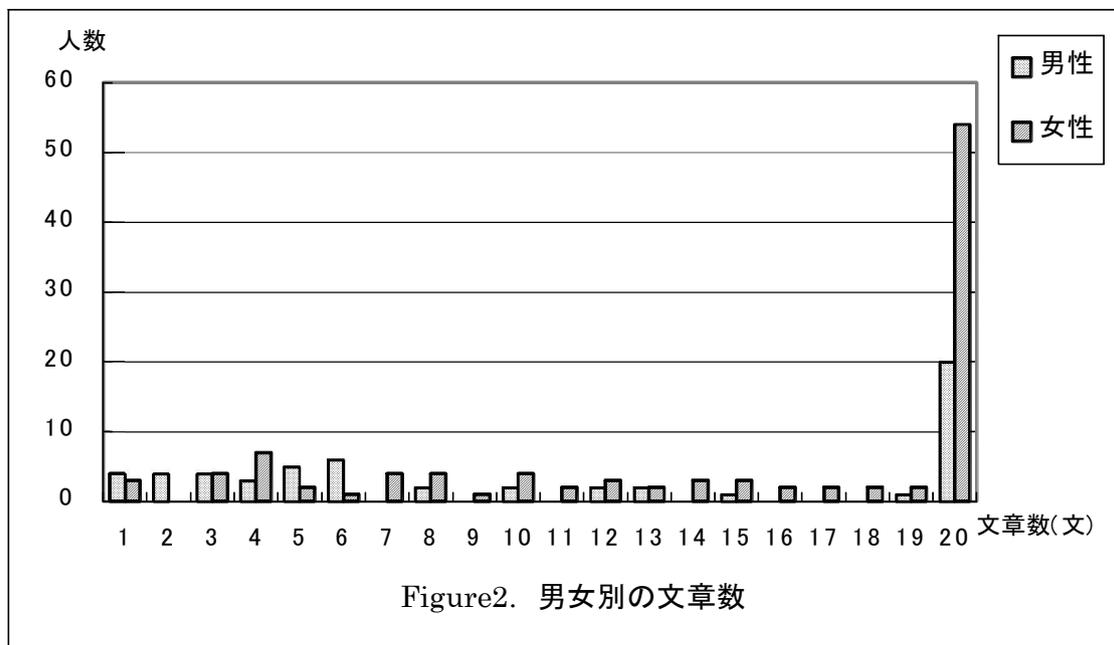
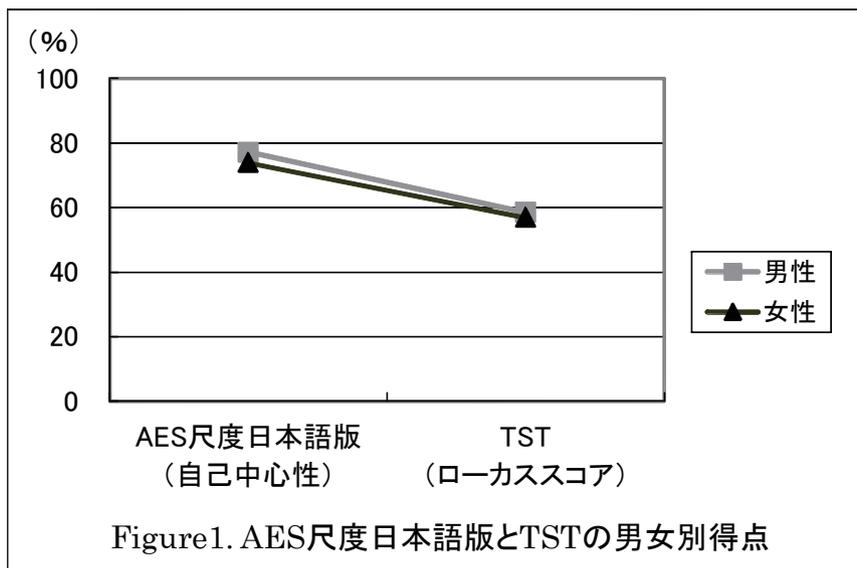
また, AES尺度日本語版とTSTの得点を比べる際は, 相対的に比較するため, 両者を百分率に置換した。なお, TSTのローカス・スコアは点数が高いほど社会的繫留度が高いことを示しているので, 百分率を逆転して求めた。例えば, ローカス・スコアが20文中18点である時18/20で90%ということになるがこれは社会的繫留度が高く, 自己中心性は低いことを示しているので, 自己中心性は10%になる。

### 結 果

AES尺度日本語版の自己中心性項目の素点平均点は, 男性で38.57(SD=5.51), 女性が36.88(SD=4.71)であった。TSTのローカス・スコアの素点平均点は, 男性で5.45(SD=6.51), 女性が6.11(SD=6.02)であった。AES尺度日本語版とTSTそれぞれで測定された自己中心性得点の平均点を百分率で男女別に表したものが Figure1

である。尺度と男女別の2要因分散分析を行ったところ、尺度と男女別の交互作用はみられなかった。尺度の主効果に有意差が見られた ( $F_{(1,159)}=32.27, p=.00$ )。つ

まり、AES尺度日本語版の方がTSTより高得点であった。性別の主効果に有意差は認められなかった。



また、TSTの文章数を男女別の人数で表したものが Figure 2

である。TST全体の平均得点に男女差は認められなかったが、

文章数や反応などの内容について男女差を検討した。男女の平均回答文章数は、男性が11.02 (SD=7.61)であり、女性は14.85 (SD=6.47)であった。TSTの文章数に男女で有意な差があるのかをみるためにt検定を行った。その

結果、有意差が認められた ( $t(97.90) = 3.20, p = .00$ )。つまり、女性の方が男性よりも文章数が多かった。

TSTの反応を回答番号別に100%の比率で表したものがFigure3(男性)とFigure4(女性)である。

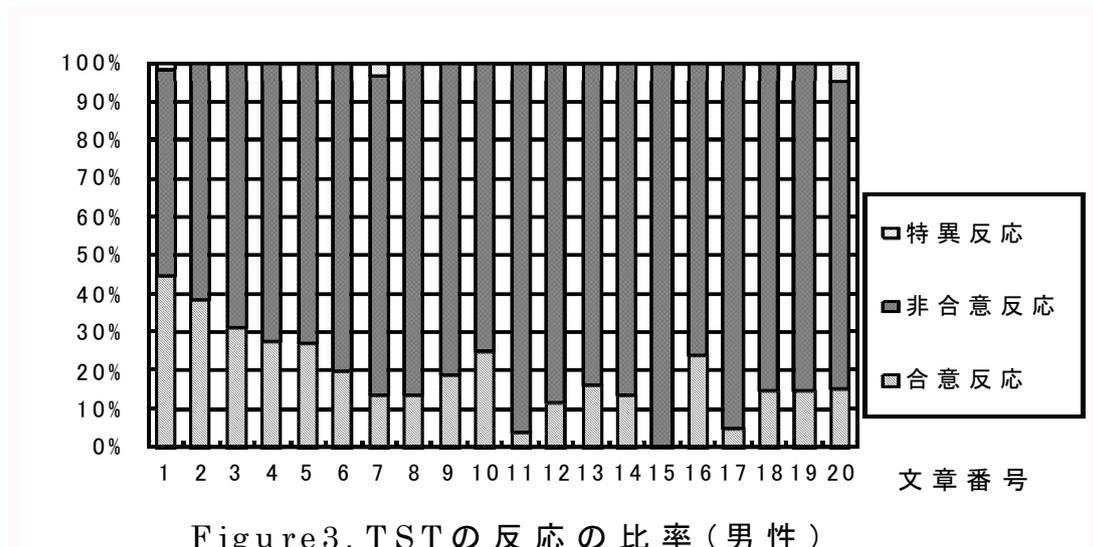


Figure3. TSTの反応の比率 (男性)

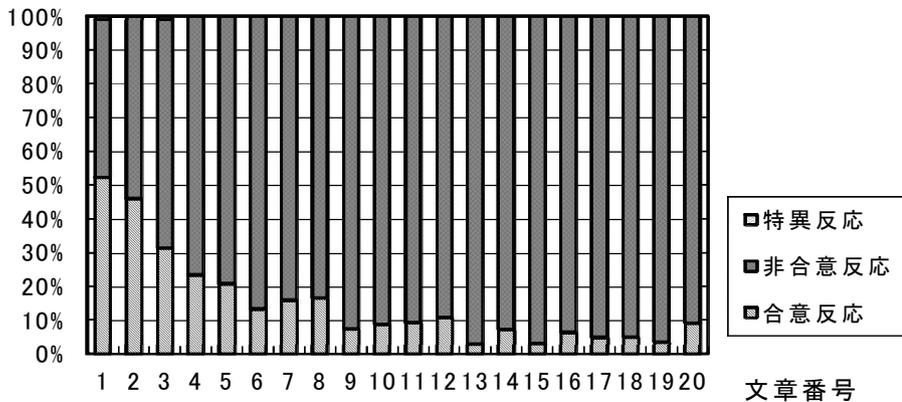


Figure4. TSTの反応の比率 (女性)

Table1. TST の男女別反応別数 (%)

性別 \ 反応	合意反応	非合意反応	特異反応	合計
男	136(22.0)	478(77.5)	3(0.5)	617(100)
女	270(17.3)	1287(82.6)	2(0.1)	1559(100)
合計	406(18.7)	1765(81.1)	5(0.2)	2176(100)

Table2. 合意反応の男女別人数と例

回答番号	男		女	
	人数	例	人数	例
1	25	男だ/人間です	55	大学生です/女です
2	20	地球人である/〇〇学部です	47	女です/19歳です
3	15	〇〇県出身である/学生だ	32	〇〇大学生である/女
4	12	19才である/〇〇座だ	23	〇〇に住んでいる/長女である
5	11	〇型だ/次男です	19	18さいです/姉がいます
6	7	人間です/水泳部員です	12	B型です/〇〇出身である
7	4	一人暮らし/生きています	14	AB型です/学生である
8	4	自転車通学だ/〇〇県出身	14	実家暮らしです/〇大1年生である
9	5	〇大の生徒です/一人暮らしだ	6	5人家族だ/〇〇座です
10	7	地球にいる/長男です	7	日本人だ/一人暮らしだ
11	1	11月生まれです	7	4人家族の姉です/県外出身
12	3	19歳です/〇〇出身だ	8	O型だ/大学に通っている
13	4	一人暮らしをしています/来年20歳です	2	地元生です/空手部です
14	3	バイトをしています/62kgの体重です	5	A型です/バイトをしている
15	0		2	人間です/家から駅までは自転車で通っています
16	5	〇〇型です/6人家族です	4	4人家族です/19歳です
17	1	3人姉弟です	3	〇〇出身/〇〇座です
18	3	人です/日本人だ	3	一人暮らし/O型です
19	3	〇〇座です/4人家族だ	2	4人家族です/バイトしていない
20	3	兄弟がいる/1月生まれです	5	兄弟が下に2人いる/生きています

Table3. 非合意反応の男女別人数と例

回答番号	男		女	
	人数	例	人数	例
1	30	気分屋/元気です	49	音楽が好き/今、お腹がすいている
2	32	勉強が嫌い/バスケットが好き	55	猫好きである/背が低い
3	33	自己中/サッカーが好きです	69	甘いものが好きです/お笑いが好き
4	32	お腹がすいている/ポジティブです	75	冬が好きです/テレビをよく見ます
5	30	気まぐれ/野菜は嫌いです	72	食べることが好きです/友達が好きだ
6	29	秋が好きである/背が低いです	77	英語がニガテです/マイペース
7	25	数学が好きだ/金欠だ	74	そうじが好き/お金がない
8	26	人からマメだといわれる/テニスが好きです	70	服が好き/どこか冷めている
9	22	音楽が好きだ/先生になりたい	74	朝起きるのが苦手です/明るいです
10	21	短気だ/運動が好きです	72	よく悩む/お菓子が大好きだ
11	25	時間が欲しいです/めんどくさがり屋です	68	犬を飼っています/寒がり
12	23	食べるのが速い/無口です	65	色白になりたいです/ひねくれてます
13	21	ピアノを弾くのが好きだ/寝たい	68	背が低いです/ダイエットしてます
14	19	ゲームが好きだ/英語が苦手だ	63	酒好き/眠いです
15	22	テレビをよく見る/徳島が好きです	63	元気です/読書が好きだ
16	16	歩くのが好き/時計をしています	58	太ってます/心理学に興味がある
17	20	チョコレートが大好きです/巨人がきらいだ	57	実家大好きです/おもしろくなりたいです
18	18	野球が好きです/眠い	55	よく寝る/チーズが食べたい
19	18	人の話を聞くのが下手だ/本が好きです	54	好き嫌いが激しいです/英語が好きだ
20	16	バナナが嫌いです/努力家です	49	最近魚が好きです/落ち込んでいる

Table4. 特異反応の男女別人数と例

回答番号	男		女	
	人数	例	人数	例
1	1	(名前)です	1	(ニックネーム)です
3	0	—	1	〇〇×である
20	1	(名前)です	0	—

また、男女別にすべての反応数 がある。TST の反応の比率に男女と割合を示したものが Table1 で 差があるのかを検討した結果、

有意差が認められた( $\chi^2(2)=9.15$ ,  $p=.01$ )。その後、文章番号別に反応と男女別の $\chi^2$ 検定をした結果、10文目( $\chi^2(1)=4.73$ ,  $p=.03$ )、13文目( $\chi^2(1)=5.37$ ,  $p=.02$ )と16文目( $\chi^2(1)=4.88$ ,  $p=.02$ )で有意差が認められた。いずれも男性は女性よりも合意反応が多く、非合意反応が少なかった。TSTの男女の反応別の推移人数と例はTable2～4に示す通りである。特異反応は反応数が少ないため、反応が見られた回答番号のみを示している。また、固有名詞など個人が特定される可能性があるかと判断したものには、特定できないように記載を変更した。

### 考 察

本研究では、青年期である大学生を対象にAES尺度日本語版とTSTというそれぞれ自己中心性の程度を調べる尺度を実施し、両尺度に違いがあるのか、そして、違いが出るとしたらどのような違いなのかを、男女別に青年期特有の自己中心性について検討することを目的とした。

AES尺度日本語版とTSTの平均得点は、AES尺度日本語版の方がTSTより得点が高かった。このことからAES尺度日本語版とTSTは、それぞれ異なった自己中心性をみていると考えられる。これは一口に自己中心性といっても様々な側面があるということを示している。AES尺度日本語版は、「自身焦点」と「想像上の観客」という2つの自己中心性の側面をみている(Yamamotoら, 2008)。TSTに関しては、合意反応が多く、社会的・客観的事実を述べる比率が高いことが明らかとなった。つまり、TSTを用いた場合、青年期では自分を客観的・社会的枠組で判断していると言える。

次に、TSTの文章数を男女で比較したところ、女性は男性より文章数が多かった。TSTの文章数について、山田(1989)の研究では大学生の平均記述数は12文となっているが、看護学生を対象とした別の研究では平均19～20文となっており、このことに関して川瀬・松本(1997)は「『私は誰か?』とじっくり自問自答することができたか否か、ある

いは日頃から自己について内省したり、意識したりすることがあるかどうか、記述数に反映されているのかもしれない」と述べている。このことから、女性の方が男性より自身について日頃からよく考えることが多いといえるかもしれない。また、女性の方が自分自身を開示することを容易に行うことができるが、男性は日頃、自分自身について考えることをあまり行わないか、開示することが苦手などの理由が考えられる。しかし、これは一般に女性の方が男性より言語能力が高いと言われ、文章を書くことに対してあまり抵抗がなかったということも考えられるため、今後は、自分自身についてあまり考えないのか、文章を書くこと自体に抵抗があるのかなど、感情の面も考慮した尺度を作成する必要があるかもしれない。

男女別に TST の反応比率を比較した結果、男性の方が女性より合意反応が多かった。星野(1986)によれば、社会的・客観的事実を述べた合意反応は回答の前半、特に 5 答目までに出現し

やすく、その後、非合意反応に転換しても、終盤の 17, 18, 19, 20 答目あたりに再び合意反応が出現することは珍しくないとしている。このことから、今回有意差がみられた 10, 13, 16 答目は非合意反応が出やすい回答番号だったと思われる。しかし、そこでは男性は女性よりも合意反応が多かった。つまり、男性は女性に比べて自身のことを客観的に捉えていると思われる。

また、全体的にも男性の方が合意反応の出現率が多く、女性の方が非合意反応の出現率が多かったのは、自己について男性は客観的に、女性は主観的に捉えることが多いと思われる。しかし、男女でローカス・スコアに有意差が認められなかったのは、男性の多くは合意反応が回答前半に集中し、女性は後半になっても合意反応が出たことが関係していると思われる。また、男性はローカス・スコア 0 点だが、比率的に女性よりも多かったことも要因の 1 つであろう。つまり、男性は自身について客観的な面に注目して客観→主観と捉

えているが、女性は主観的な部分に注目して自身のことを捉える傾向があり、客観→主観→客観というように自己を捉えているのではないかと考えられる。自己中心性の面から言えば、主観的な面に注目しがちな女性の方が高いと言えるかもしれない。

以上のことから、AES 尺度日本語版と TST はそれぞれ異なった自己中心性を測定していると言え、そのことは自己中心性に様々な側面があることを示している。Elkind や Enright は、Piaget の認知発達理論に基づき、青年期に新たに出現する自己中心性の内容について研究を行っている。自分と他者について得られる情報の違いに起因するバイアスとして認知理論から自己中心性を検討する研究もある(工藤, 2010)。

自己中心性は、自己と他者との関係性の中で、他者からの評価を自己が推測する時に生じるものである。他者視点取得の歪みが生じることで自己中心性が生じると言える。本来、他者の思いや認識などに関する情報を

他者と同じくらい有することは不可能であり、他者視点を正確に推測することは困難である。それに加え、その時の自己の心理的状态なども影響を与えと言える。

自己中心性について、発達の視点、認知的視点からその本質、特徴などを研究し、社会生活の中でそれらの知見を活かし、滑らかな社会生活を営めるようにすることが今後の課題と言える。

#### 参考・引用文献

- Burack, J.A., Flanagan, T., Peled, T., Sutton, H.M., and Zygmuntowicz, C. 2006 Social Perspective-Taking Skills in Maltreated Children and Adolescents *Developmental Psychology* 42(2) 207-217.
- Coleman, J and Hendry, L.B. 1999/2003 *The Nature of Adolescence*. Taylor & Francis Group Ltd. (白井利明他訳: 青年期の本質, ミネルヴァ書房 48-50)
- Elkind, D 1967 Egocentrism in Adolescence *Child Development* 38 1025-1034
- Enright, R.D., Shukla, D.G., Lapsley, D.K. 1980 Adolescent Egocentrism-Sociocentrism and Self-Consciousness *Journal of*

- Youth Adolescence 9 101-116  
Holmbeck, G.N., Crossman, R.E., Wandrei, M.  
L., and Gasiewski, E 1994 Cognitive Dev  
elopmet, Egocentrism, Self-Esteem, and  
Adolescent Contraceptive Knowledge, Att  
itudes, and Behavior Journal of Youth and  
Adolescence 23 (2) 169-193
- 星野命 1986 20 答法 パッケ  
ージ・性格の心理 第 6 巻 性  
格の理解と把握 ブレーン  
出版 169-185
- 川瀬正裕・松本真理子 1997  
新自分さがしの心理学－自  
己理解ワークブック－ ナ  
カニシヤ出版 14-17
- 工藤恵理子 2010 第 4 章社会的  
推論とバイアス(浦光博・北  
村英哉編 展望 現代の社  
会心理学) 誠信書房 70-90
- 山田ゆかり 1989 青年期にお  
ける自己概念の形成過程に  
関する研究－20 答法での自  
己記述を手がかりとして－  
心理学研究 60 (4) 245-252
- Yamamoto,M.,Tomotake,M., Ohmori,T  
2008 Construction and reliability o  
f the Jap-anese version of the Adoles  
cent Egocentrism-Sociocentrism (AE  
S) scale and its preliminary applicat  
ion in the Japanese university stude  
nts The Journal of Medical Investiga  
tion 55(3,4) 254-259

(受付日2011年9月30日)

(受理日2011年10月14日)